

「地域の『農』をあきらめない」人びと

——宮城県大崎市における協業事例——

岡山大学 藤井和佐

1 目的

本報告は、地域農業の維持が地方社会解体の危機回避につながるということを射程に、宮城県大崎市鳴子地区において米の生産・販売活動等を展開する NPO 法人「鳴子の米プロジェクト」（以下、「米プロ」と略記）を事例として、その協業・活動のあり方から地方社会存続の可能性について現地共同調査の成果に基づき明らかにすることを目的とする。

米どころと言われる宮城県においても中山間地域の農業、とりわけ稲作をめぐるのは、担い手の減少・高齢化、耕作放棄地の増加などが喫緊の課題であることは例外ではない。それらを補うために、農作業の協同、農用地の集約等を目的に、集落営農及びその組織化・法人化が政策的にも進められている（農林水産省 2016）。

米プロの活動は、このような政策指向とは一線を画するものである。

米プロをプロデュースした民俗研究家の結城登美雄は、「『地域が支える農業』へのチャレンジ」（結城 2009：173）と述べている。そして、「地域の『農』をあきらめない」は、米プロの理事長の言葉である。本報告では、米プロが生まれて 10 年が過ぎた今、その「チャレンジ」の結果として鳴子地域がどのような状況にあるのかをとらえていきたい。

2 方法

米プロの地域における位置づけと活動のあり方をとらえるために、主に以下の諸点に注目する。

(1) 調査対象地域について：人口・産業構造、農業及びコミュニティの諸相、地域活動

(2) 米プロについて：組織形態と活動内容、主要アクター・参加者とその関係性

以上から、米プロの内発的・自律的活動が、地域農業を維持している状況と、その地域社会における意味をとらえることができるであろう。

3 分析と考察

米プロの 10 年間の歩みで特徴的なのは、生産者の米づくりへの意欲向上を企図している点である。

米プロの拠点である旧鳴子町の鬼首地区は、標高が高く、米づくりには厳しい地域であった。そこに東北 181 号（「ゆきむすび」）という山間地に向けた新品種が開発され、その試験栽培を始めたことを契機に、生産者の米づくりへの意欲向上が段階的にはかかれていく。米づくりで利益を出すことを目標とした独自の販売価格の設定、生産者個人名での出荷、手間のかかる「くい掛け生産米」だけではなく、「コンバイン生産米」の販売開始による無理のない営農も、生産者の意欲を減退させない。息子世代の U ターンもあったという。また、支え手は、消費者のみならず、地元の女性グループや子どもたち、温泉旅館経営者など多岐にわたる。さらに、支え手との交流会、「農」を活用したイベントの開催等を地域のなかに位置づける努力も、「地域農業」の存在を地域住民に忘れさせないしているのである。そして新たな「農」的取り組みが、生まれている。

米プロの活動を契機とした動きのある鳴子地域は、U ターン、I ターンにもつながっている。地域における一連の取り組みが、地域をあきらめない、希望につながっていくと考えられるのである。

参考文献

農林水産省, 2016, 『集落営農実態調査報告書』農林水産省ホームページ(2016年6月6日取得、<http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/einou/index.html>) .

結城登美雄, 2009, 『地元学からの出発～この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける～』農山漁村文化協会.

追記

本報告の主な成果は、JSPS 科研費 26285112 による。